

SLE とパラミキソウィルス群

日本大学医学部

濱 島 義 博

パラミキソウィルス群に極めて類似したと考えられる物質が SLE 患者の生検材料中に見出された事実はこれが SLE 病原体に通ずるものであるか否やは別としてこんにちその意義を徹底的に追究することは無駄なことではない。

さて過去20年に及ぶ経験から SLE という疾患には抗核抗体の存在すること、顔面紅斑、腎炎をはじめさまざまな特有ある臨床像を呈すること、全身の系統的血管炎を基本とすること、結合織にも特有な病変を示すこと、罹患率が若い女性に多いこと、活動期における血中補体価の低下、などこの疾患をめぐる多彩なパターンがすでに特徴づけられている。

この SLE に見られる多彩な像も所詮は抗原 DNA (あるいは他の核成) と抗核抗体とが反応しあって生じた溶性免疫コンプレックスが全身血管系に障害を与えた結果生ずるものと理解されている。その中で特に毛細血管なかんづく顔面皮膚、腎糸球体などに著明な変化が起ることから上記の臨床像が示されるものである。つまりは SLE という疾患が代表的な immune complex disease であり、この疾患を惹起する重要な要素の一つが抗核抗体なのである。言い換れば抗核抗体なくてはこの疾患は発生しないだろうと割切って考えても不思議ではない。

そこで SLE の病因を知る為にはこの抗核抗体の発生あるいはその抗原の追究が重要な鍵と考えられるものであり、従って抗核抗体に対する抗原がいまだ全く不明である時期に患者材料から高率にパラミキソウィルス様粒子の証明されたことはその病因解明に通ずる一方向として重要視してもいたしかたないことである。しかしながらこのウィルス様物質の存在は SLE に対してはあくまでも非特異的な存在として取り扱われるべきであろう。

従来、SLE に見られる抗核抗体なるものは

これが強く細胞の核と反応したり、核酸 DNA と強く反応することからこの抗核抗体に対する抗原は細胞成分であることから本疾患を自己免疫という立場で理解されてきたむきが甚だ多かった。あるいはまた正常人には見られないこのような特殊な抗体の存在は患者の抗体産生機構とくにリンパ球の感受性に異常過敏性の存在を考られる傾向も強かった。しかるにもしこのような物質つまり外来性の物質が抗原として働き得る可能性があるならばいま述べた二つの理由は成立し得ないこととなるであろう。

果してパラミキソウィルス様の物質が抗核抗体の抗原であろうか。われわれの研究室では目下その追究を積み重ねているのではあるが我々の前に立ちふさがっている事実はこのウィルス様物質が DNA を合成するのではなくて RNA 合成のウィルスということである。またパラミキソウィルス感染の患者つまり麻疹患者、おたふくかぜ患者、パラインフルエンザ患者などの血清中に抗核抗体は証明されていない。また犬ジステンパーでも同様抗核抗体の証明がなされていない。つまりパラミキソウィルス感染では抗核抗体という特殊な抗体の認められた事実は未だかつてない。

Vero 細胞に麻疹ウィルスを持続感染させた我々の実験では多数の巨細胞の出現と細胞核物質の放出、核の膨化と破壊、核物質の融解化などの著明な変化が見られた。そしてこの培養細胞株から DNA 成分を抽出して寒天拡散法による SLE 患者血清との反応をチェックしているが現在のところ未だ抗原性を示す precipitate は証明されておらない。これは実験方法に多くの問題を残しているがウィルス様物質感染によって核内 DNA に変質が起るや否かこの問題を解決する一つのメドと考えられている。